

---

# 仮面ライダーバース&アクセル&ギャレン サブライダーズ・トリプルアクション

ホットコーギー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

仮面ライダーバース&アクセル&ギャレン サブライダーズ・トリプルアクション

### 【Nコード】

N7916Z

### 【作者名】

ホットコーギー

### 【あらすじ】

カンナギ事件から三ヶ月後…警視庁の刑事として活躍していた後藤慎太郎の元に、再び鴻上からの依頼が！

そして鴻上の元には、仮面ライダーアクセルこと、照井竜の姿もあって…一体鴻上の依頼とは？

そして後藤達の前に現れる謎の少女・翡翠アヤカ…緑色のライダーに変身する彼女は、凄まじい復讐心を抱いていて…

後藤達は、そんな彼女の復讐に染め上げられた心を解き放つことが

できるのか？

バース、アクセル、そしてギャレン…サブライダー達と大シヨツカ  
ー残党との戦いが始まる！

この作品は、「レッツゴー仮面ライダー」、「MOVIE大戦ME  
GAMAX」のように、同じ時系列に歴代ライダーが存在する世界  
観を採用しております。

## オリジナル仮面ライダー&オリジナルキャラクター紹介

### 仮面ライダーP電王

人口イマジン・イブによる暴走事件を経験した時間警察が開発したライダーシステム。

問題であった人口イマジンシステムをオミットし、G電王をモチーフにして作られた試作型システムで、Pは「Prototype」の頭文字から取られている。

武器はG電王と同じ、デンガッシャー・十手モード、ガンモードをメイン武器に戦う。

銀と黒がメインという落ち着いたカラーリングであったG電王と比べ、P電王はエメラルドグリーンと金色という派手なカラーリングとなっていることが特徴である。

本来はアヤカではなく、違う人物に支給されたシステムらしいのだが…

### 翡翠<sup>ひすい</sup>アヤカ

時間警察の新米刑事。

丁寧な口調で話す落ち着いた美少女だが、なぜかキバ男爵には感情をむき出しにして戦いを挑む。

一体、彼女とキバ男爵の間に何があったのか？

## オリジナル仮面ライダー&オリジナルキャラクター紹介（後書き）

少し痛々しい意見になりますが、オリジナルキャラクター・翡翠アヤカの顔のイメージは、ボウケンピンク・西堀さくらを演じた末永遥氏をイメージしていただければ幸いです。

## プロローグ

現代から数十年先の未来…

人里から遠く離れた山の奥地の洞窟に、一人の大柄の男の姿があった。

男はまるで映画に登場する原住民が来ている衣装を模した服装に身を包み、頭には巨大なマンモスの髑髏を象った兜を被っていた。

そして右手には大きな象牙型の槍を握り、それを怪しく漂わせるように操りながら、強い念を込め、呪文のように何度も言葉を呟き、繰り返していた。

「ノードロミス…エレガミヨ…ノードロミス…エレガミヨ…」

男の前には岩で作られた祭壇があり、その上には木製の棺が置かれていた。

木製の棺の両脇には太く、長い赤い蝋燭が二本、灯籠の中で怪しく炎を灯している。

そして棺の中には、百万年という長い年月でカラカラに干からびた女のミイラが納められていた。

「ノードロミス…エレガミヨ…ノードロミス…エレガミヨ…！」

この男の名はキバ男爵…かつて仮面ライダーV3が倒したデストロン幹部・「キバ男爵」とは並行世界の別人であり、かつて全並行世界の征服を企んだ大ショッカーの生き残りである。

組織が滅びた今も、彼は再起のチャンス伺い、あらゆる世界。そして時間を彷徨っていたのだ。

キバ男爵は新たに世界征服のチャンスを掴むため、戦力を増強するために、未来の世界で発掘された古代遺跡に眠る「魔女のミイラ」

を、自らが得意とする古代魔術で復活させようとしているのである。

「ノードロミス…エレガミヨ…！…ノードロミス…エレガミヨ！」

古代の呪術を操る魔術師でもあるキバ男爵は、その凄まじい魔力を、呪文を唱え魔女のミイラに流し込んでいく。

やがて呪文の語尾が強くなっていくうちに、灯籠の中に灯る蠟燭の炎が強く揺らめき、棺がグラグラと揺れ始めた…

「ノードロミス…エレガミヨ！ノードロミス…エレガミヨ…！」

語尾の強さが最大まで高まった瞬間、灯籠の中の炎が消え、棺は白い煙を上げて爆音と共に破裂した。

そして朽ちていたはずのミイラは消え、その代わりに白い肌と艶やかな美貌を兼ね備え、その艶めかしい体を紫色の薄い衣で包んだ美しい女の姿があった。

女は祭壇から降り、キバ男爵に跪くと、美しい声色で言葉を発した。

「キバ族の母なる魔女スミロドーン…百万年の眠りより目覚め、今ここに蘇りました。」

彼女の名は魔女スミロドーン…キバ男爵が率いる怪人軍団「キバ一族」の原始の存在である古代魔女である。

キバ男爵は蘇ったスミロドーンの姿を見ると、彼女を歓迎するようににやりと笑い、口を開いた。

「おお！蘇ったかスミロドーン！」

「死の眠りから解放していただき感謝いたします、キバ男爵様。このスミロドーンの力、なんなりとお使いくださいませ。」

それを聞いたキバ男爵は、一族の長たる威厳を込めた表情でスミロドーンを見下ろし、満足気にうなづいた。

「うむ！我々は仮面ライダーを倒し、世界の全てを大ショッカーの手中に収めるため、ツバサ大僧正と合流して世界征服計画を実行する！貴様にはその力添えをしてもらうぞ！」

「ハッ！何なりとお任せくださいませ！」

スミロドーンは立ち上り、キバ男爵への加勢と忠誠を誓った。  
そんな時である…

「そこまでよ！」

洞窟の中に、勇ましく女性の声が響き渡る。

キバ男爵とスミロドーンは驚き、声が聞こえた方向を振り向いた。

「誰だ！？」

「忘れたとは…言わせない！」

そこには、一人の仮面を被った戦士の姿があった。

その戦士は身をエメラルドグリーンのスーツに包み、胸部には金色のアーマー、両手両足には同じように金色の防具が備え付けられていた。

そして煌びやかな緑の仮面には、パトライトをモチーフに象られた赤い複眼が輝き、腰にはGデンオウベルトと同型の変身ベルトが装着されていた。

戦士の名は仮面ライダーP電王：時間警察により、人口イマジネーション「イブ」をオミットした簡易型G電王をコンセプトに開発された電王タイプの試作型ライダーシステムである。



「貴様は…馬鹿な！？あの時確かに…」

キバ男爵はP電王の出現に驚き、かっと目を見開いた。彼はP電王のことを知っていたのである。

しかし、キバ男爵は疑問を抱かずにはいらなかった。

このライダーは確かにあの時、自分のこの手で…

しかし、ふと一人の少女の姿が浮かんだ。

このライダーの補佐を務めていた、時間警察の新米刑事である少女の姿を…

それを思い出したキバ男爵は、馬鹿にするようににやつきながら、P電王を睨んだ。

「そうか…貴様、あの小娘だな？」

「やつと見つけた…キバ男爵！お前だけは、絶対に許さない！」

P電王は腰に備え付けられた四つのデンガッシャーをG電王が使っていたものと同じ十手モードへと組み替えると、その切っ先をキバ男爵へと向けた。

それを見たスミロドーンはキバ男爵の前に立つと、爪を構えるようなスタイルを取り、P電王を睨んだ。

「理由は知らないけど…キバ男爵様に刃を向ける事はこのスミロドーンが許さないわ！」

「クッククク…頼むぞスミロドーン。」

キバ男爵はスミロドーンに戦闘を任せると、スミロドーンは一步前に歩み出す。

P電王はそれを自分の力を馬鹿にされたと感じ、激高した。

「ふざけるな！いくらなんでも、生身の女に相手が務まるか！」

「ハッハッハッ！甘いわ小娘！」

キバ男爵は真実を知らぬP電王を嘲笑った。  
そしてスミロドーンに視線を移し、話を続ける。

「貴様はスミロドーンを見くびっている！スミロドーン、お前の真の姿を見せてやれ！」

スミロドーンはまるで獣のように舌なめずりをし、心の奥底に残虐性を隠した黒い笑顔で微笑むと、まるで舞を踊るような動きをしながら、地面に膝をつく。

その瞬間、スミロドーンの姿は、長く鋭い大きな牙が生えた獰猛の虎の顔と、刃のように白銀に輝く爪の生えた両腕、逞しい筋肉が発達した肉体を持った虎の怪人へと変貌を遂げた。

キバ一族の母なる魔女スミロドーンの正体である、虎の始祖「スミロドン」の怪人・原始タイガーである。

「怪人……！？」

P電王は、スミロドーンの突然の変身に驚き、数歩後ずさった。  
キバ男爵は槍の切っ先でP電王を指し示すと、原始タイガーに命令を下した。

「行け！原始タイガー！その虫けらを排除するのだ！」

「又オオオオオオオオ！！」

原始タイガーは凄まじい雄たけびを上げると、獲物を狩る虎のごとき速さでP電王へと襲い掛かった。

P電王はとっさにデンガッシャーを振るい、応戦したが、原始タイガーのスピードはその上を行った。

戦闘訓練は積んでいるものの、実戦経験の少ない若手戦士が装着したP電王が振るう十手攻撃は、キバー族の中でも隋一の戦闘能力を誇る原始タイガーの動きを捉え切れない。

原始タイガーの爪はP電王の刃を難なく弾き、受け流しながら、彼女の金色のアーマーを斬りつけていった。

「クツ…駄目…私の力じゃ…！」

P電王は悔しかった。

例え敵わなくても、命を落とすことになるうとも…初恋の「あの人」の命を奪ったキバ男爵に…太刀入れたかった。

しかし、自分ではキバ男爵どころか、その下に就く怪人にすら勝てない…

どうして自分はこんなにも無力なのだ…復讐を果たす力が欲しい…だがその願いも空しく、原始タイガーの吐いた灼熱の炎が、P電王の体に浴びせられた。

「キヤアアアアアアア！」

その威力にP電王は吹っ飛ばされ、洞窟の岩壁に激突し、崩れ落ちて硬い地面に叩きつけられた。

それを見た原始タイガーはスミロドーンに戻り、汚物を見るかのような眼でP電王を見ると、彼女を嘲笑った。

「全く、齒応えがないっていつのはこのことね。貴女が仮面ライダー？アッハッハッハ！ちゃんちゃら可笑しいわ！」

スミロドーンはP電王に近付き、彼女の首根っこを掴んで猫を乱暴に扱うように持ち上げると、耳元で囁いた。

「アンタに相応しい称号を上げるわ…名付けて、役立たずの、子・ブ・タ・ちゃん」

P電王は仮面の下に隠した唇を強く噛み、否定できない自分の非力を呪った。

キバ男爵はその様子にほくそ笑み、スミロドーンに指令を下す。

「スミロドーン！そんな雑魚など捨て置け！」

「ハッ！キバ男爵様！」

スミロドーンはP電王を地面に投げ捨てると、振り返り様に囁く。

「それじゃあね、子豚ちゃん」

そしてキバ男爵の隣に歩み寄ると、男爵は再びP電王に向けて大声で伝える。

「ハッハッハ！小娘！あんな虫けらの復讐など諦め、時間警察など抜けて男探してもするが良い！貴様のような「役立たずの子豚」には、男の品定めが良く似合うわ！ハッハッハッハッハ！さらばじゃ！」

その言葉を残し、キバ男爵は過去に続く次元の穴を開き、スミロドーンと共にそれを潜って姿を消した。

二人が潜った次元の穴が消滅すると、P電王はベルトを外して変身を解除した。

オーラアーマーの下からは、時間警察の女性用の制服に身を包み、エメラルドグリーンに彩られた蝶の髪止めで長髪をまとめた少女が現れた。

彼女の名は翡翠<sup>ひすい</sup>アヤカ…現在のP電王の装着者である。

「畜生…畜生お！！うわあああああ！！」

アヤカは乱暴な口調で悔しさを表し、華奢な拳で何度も地面を殴りつけ、泣き崩れた。

復讐したい相手どころか、その側近にすら敵わなかった悔しさ…愛した人の無念すら果たせなかった自分の非力さ…敵が付けた蔑称通り、自分は何もできない役立たずであった。

凄まじい悔しさと屈辱は涙となって彼女の瞳から零れ落ちる。

しばらくの間、アヤカは地面に頭を押しつけたまま、存分に泣き続けた。

しかし、いつまでも悲しんではいけない。

例え敵わなくても、時間警察として、「あの人」の遺志を継いだ戦士として、キバ男爵は見逃せない敵なのである。

「…もう、泣くだけ泣きました…先輩、見ていてください。必ず…仇は討ちます…！」

アヤカは自分の時間警察用のライダーパスを取り出し、備え付けられたパネルを手慣れた手つきで操作すると、頭上にワームホールを出現させ、時間移動で逃げたキバ男爵とスミロドーンを追った。

自分が今から向かう時間に、どんな出会いが待つのか…

復讐に縛られた彼女の心は、まだそれを知らずにいた。

## プロローグ（後書き）

またまた痛々しい意見になりますがキバ男爵は角田信明氏、スミロドーンは小沢真珠氏の姿をイメージしていただければ幸いです。  
ツバサ大僧正は…もうイメージする方は固まっています。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7916z/>

---

仮面ライダーバース&アクセル&ギャレン サブライダース・トリプルアクション

2011年12月25日14時52分発行